

巨人の接待

小川 洋子おがわ ようこ

内容理解

この文章で作者は、通訳を務める「私」との交流を通し、「巨人」と呼ばれる男の生き方を描こうとしている。本文を読み直しながら、空欄に入る適切な言葉を補ってみよう。

通訳

・空港で巨人を待つ人々は、準備に余念がない。花束のリボンが何度も締め直される。私は、通訳として最前列、ここで巨人の言葉を通訳できるのは、私一人しかない。

・バルカン半島の小国の村々だけで使われている地域語が、巨人の言葉である。作品は
1 で書かれ、インタビュなど、これ以外の言葉は口にしない。

◇ 小さな旅行鞆一個で来日 姿を見せた巨人。小柄な体、痩せていて、発達したおでこの
せいで眼球は落ち窪み、目の ² を読み取るのが難しい。ラフな装いをきちんと
着こなし、胸ポケットに一本の鳥の羽を挿している。

◇ 小さな声の巨人 巨人の口元が動き、息のようなものが漏れ出す。編集長に背中をつかれ、
「このたびはお招きいただき、ありがとうございます。」³ 咄嗟に口から出まかせ、いきなり通訳の ³ を犯して台詞を捏造する。花束が渡され、拍手が起きた。

◇ ホテルの部屋、公の席。

・「この花を飾りたい」一続きの輪郭を持った言葉たちが、軽やかにこぼれ落ちてくる。青紫色の
リンドウが飾られ、階下に退く私に、巨人はリンドウの一本を差し出した。

・インタビュ、サイン会など、⁴ の席では巨人の声はとても小さい。彼の本当の優しい
声を知る私は、大事な使命を帯びた ⁵ になった気持ちになる。質問を訊いた後の巨人の
長い沈黙。沈黙を霧散させる巨人の短い言葉、言葉以上に多くのものが伝わる。貧相な
サイン、巨人との握手、人々は ⁶ を仕舞うように本を閉じる。

語句

この文章の中で使われていた次の言葉を使って、短文を作ってみよう。

大仰（三三六・上5）

内輪（三三二・上10）

異議（三三五・上2）

目障り（三三五・下14）

◇ 巨人のお話し

ヨーロッパ・アルプスの東南端の小村に生まれ、父は勤勉、働き者の母に本を与えられ読み耽る。気に入ったのは地域語の⁷。弟、妹たちにおとぎ話を聞かせる。天に召された双子の弟に向かっていつも話しかけた。十五歳の時、戦争、強制収容所に送られた。窓辺の小鳥に話しかけることが慰め、次のバラック、次の収容所、⁸が彼にとつて苦難の象徴だった。

◇ 会食

食べ物があると、巨人は無口になり、料理を観察し味わうのに神経を集中させる。質問には、巨人はしゃべる振りをし、私が答えを捏造して答えた。食事の最後に、私は、巨人が⁹の三分の一を残しズボンのポケットに隠すのを発見した。

◇ パン

朝十時、出かけに、胸に飾る羽を探す巨人。「お夜食が必要な時は……」に、巨人はズボンのポケットからパンを取り出し、「僕にはこれがあるから。」と答える。

◇ 自由時間

滞在最終日の自由時間に、巨人は、野鳥の森公園を選ぶ。鳥を怯^{おそ}えさせないように、通訳と二人きりで。人気のない駐車場、ペンキの剥げ落ちた看板。森の中央、座席が鳥のデザインのメリーゴーランドを見つける。巨人を乗せ、動き始める。鳥の支柱に下がるプレートには、モリスヤスクイナ（1700年）、タヒチシギ（1773年）……¹⁰した鳥たちの名が記されていた。

◇ 別れ

空港での別れの言葉、巨人は全員と握手、私にだけ手の甲にキスをしてくれた。

主 題

この作品で作者はどのようなことを描こうとしたと思われるか、次のことに着目して、百字程度でまとめてみよう。
〈着目点… 巨人がパンをポケットに忍ばせる理由〉

発 展

次の中で興味を持った事項について、図書館の書籍やインターネットなどを使って調べてみよう。

・希少言語には、どのようなものがあるのか。

・絶滅の危機にある鳥には、どのようなものがあるか。

・通訳の仕事とは、どのようなものか。

100